

カエルの御宿の本

執
貝

夜

蛙
雷

の
早

又
娘

18
成人向



目次

序	夜叉姫	いにしえ	6
壹	理恵と絵里		10
貳	鬼頭流符術	『蓮』	27
参	鬼頭流符術	『鏡花』	30
四	鬼		35

五
く
鬼辱

六
く
貪り

七
く
蓮

八
く
夜叉姫
く
現世

あとがき

4
2

5
4

6
4

7
2

7
8

本文挿絵
月工仮面

妖異伝

夜叉姫

執員の早

テキスト / 蛙雷

表紙・口絵・本文挿絵 / 月工仮面



序　夜叉姫　いにしえ

朱色の唇が、微かに蠢き音を放つ。

「ほう……」

放たれた音が、意味を成す言葉になり、その朱色の唇より漏れ出される。

「おもしろい……」

「いったい何が面白いのか？」

「我を滅せようと向ってくる愚か者達の姿は、何時もの事ながら誠に面白きものよ……」

巨大な水瓶に満たされた水、鏡面の様に平らな水面に浮かびくる者達の姿、鎧甲冑に身を包んだ武士、異形を役する陰陽師らしき者、巫女装束に身包んだ女……幾人者達の姿を見ながら、青白き肌と燃えるような赤い髪、血のような朱色の唇を持つ、女性の姿をした……見る者が見れば、美しいとすら言えるそれは言つ……

「この我を滅する事が出来ると思ひ、挑み来る者達の姿は、実に愚かしく、誠に面白い……」

美しき女性の姿……だがその姿は異形でもあつた。

それを如実に語っているのは、頭部から、天を貫くが如く生えている二本の角であり、その角の存在が、人ではない、この女が人外の存在である事を如実に語っている。

人外の存在……それは、鬼と呼ばれし者達を統べり、その頂点に立つ異形の主とも言える存在……近隣の者達は無論の事、遠く離れた都にすら、その名を知られた夜叉姫と呼ばれる異形の化生であつた。

その夜叉姫が、面白いと再び声を漏らし、その面に美しいとも醜いとも取れる、歪んだ笑いの相貌を浮かべる。

「のう……そつは想わぬか？」

歪んだ笑いを浮かべた相貌を動かし、自らの腕に抱かかえている小さな影へと夜叉姫は問つ。

「あああ……はあひい……」



夜叉姫に抱きかかえられる様にされている小さな影は、呻く様な小さな声を漏らし、夜叉姫の腕から逃れようと微かに足掻く……夜叉姫の腕に抱かれているのは人、それも着ている巫女の装束を引き裂かれ、ほとんど全裸に剥かれている若き娘であった。

「どうした？ 我的問いに答えぬか？ お主も先ほどまでは、そこに映し出された者達と同様に、我を滅せようとした。都でも高名な符術師であるつに……なあ？」

鬨るような夜叉姫の言葉、そして手が娘の乳房へと伸びて、その白く豊満な乳房を掴み揉む。

「あつ、ああああ……はあくうー！」

娘の乳房を鬨る夜叉姫の掌は、蛇の様に乳房をまさぐり、探り出した淡い紅色の乳首を指先で掴みあげ捻る。

「はぎい、ひいひいぐう……んっはあっ！」

か細い娘の悲鳴……と言うよりは喘ぎ声、それを聞きながら夜叉姫は、その相変わらぬ笑みを浮かべた顔を娘の方へと近づけ、同時に娘の顔を自分の方へと引き寄せる。

「どうしたのじゃ、初めておつた遭った時の様に、凜とした声で応えてくれぬのか？ この世に仇なす魔性の化物と、我を罵った汝じやろうに……どうしたのじゃ、何故に答えくれぬのじゃ？ 応えてくれぬと、このまま乳首を引き千切るぞぞ？」

「ひい、ひぎいー！」

夜叉姫の指が、娘の乳首を掴み引き伸ばす……千切れるほどに引き伸ばされる娘の乳首、まさに引き千切られんとした瞬間に、乳首を掴んでいた夜叉姫の指は、掴んでいた乳首を離す。

「くくく……冗談じゃて、主はまだまだ楽しめる贅じゃて、なんでむざむざと傷をつけ様か、こやつらがこの場所に来るまで、まだまだ時がある……それまでの間、存分に我を楽しませてるがよからうて……」

「あああ……いやあ……やめて、おねがい……もう……ひいぐうー！」

抗う娘の言葉は、その途中で強引に中断させられる。娘の唇を覆おう夜叉姫の唇、そして口中へと差し込まれる紅き舌、左の掌は娘の乳房を鬨り、右の掌は娘の股間へと伸ばされ、その淡い茂みを弄るように鬨る。

夜叉姫の血を塗り込めたような深紅の唇が、娘の唇を舐める様に犯す……夜叉姫の蛭の様に蠢く舌が、娘の口と喉を犯す……夜叉姫の左の掌が、蛇の動きながら娘の乳房を犯す……夜叉姫の右の掌が、男根の如く娘の股間を入念に鬨り犯して行く……

「んっ……ぐうああひううんっあああ……んぶううー！」

夜叉姫によって塞がれたままの娘の口、唇の間より微かに漏れ出す娘の呻き声……それはだんだんに、甘く蕩けだす様な艶を含ませ、犯さ

れ続ける娘は、夜叉姫の淫らで淫蕩な行為の全てを、その身に受け入れ始めた……

「気持ちよかろうて、我に全てを誓として差し出した後に、喰うてやる……おぬしの肉も……血も……魂すらもな……くくくっ……」

しかしそれは、夜叉姫の散漫と傲慢の末の油断だった……夜叉姫が、討伐に来た者達によつて、数々の犠牲の末に、この地へと封印されてしまつ事となつたのは、数日後の事であった。

さく 理恵と絵里

「理恵みたいな悪い子は、鬼が山から降りて来て食べられちゃうぞー！」

お母さんと喧嘩をしてしまったのは、些細な事であった。学校から帰った夕方、何気なく言った私の一言……

「ねえ、絵里ちゃんも学校から帰って……来ているよね？」

絵里……それは私の双子の妹の名前、こう言ってしまうと薄情に思われてしまうのだが、ついさっきまで私は絵里の事を完全に忘れていた。

絵里の事を思い出したのは、左手に巻きつけてあったミサンガ、妹である絵里とおそろいで作って交換していたミサンガが、ぷつんと千切れた事によって、不意にと言つか唐突に妹の存在を思い出し、台所に居たお母さんに聞いたからだった。

「絵里……て、だれ？」

母からの返事は、そっけないと言つか、予想外の言葉だった。

「……いや……あの……絵里ちゃん、絵里の事よ、私の妹の絵里のことよー！」

なんだろ……何か聞いてはいけない事を聞いてしまったような気がした。怖いような寒くもないのに寒いような……泣きたくなるような、そんな感じがした。

「理恵の妹で……私の娘は、理恵しか居ないでしょう？ どうしたの急に変な事を言い出して？」

お母さんは、絵里の事を完全に忘れていた……最初から居なかったとでも言つように、それは先程までの私の様に……

「絵里だよ！ 私の双子で、妹の絵里の事だよ！ お母さん、どうしたのよ、絵里の事を忘れてしまったのー！」

絵里の事を知らないと言いつけるお母さん、それに対して絵里が居ると言いつける私……何時の間にか、私とお母さんは大声で口喧嘩をし始めていた。

そして絵里が居ると言いつける私に向かって、お母さんは呆れたような口調で、山から鬼がやってきて、私を食べちゃうと脅かす。もっと小さな頃だったらともかく、私はもう小さくないんだ！

そんな子供騙しの言葉に、私はかえって反発してしまう。



「知らない！ 鬼なんか来たって平気だよ！ そんな事を言うお母さんなんて嫌いだ！ 絵里は、絶対に居るんだ。お母さんなんか大嫌いだ！」

そう言っただけは、居間から二階の部屋へとかけ上がって、ボタン！ とドアを締め切った。

「絵里……いるよね……私の妹の絵里……」

ベッドの上に寝転び、千切れたミサンガを見ながら私は、絵里の名前を呟く様に言う……絵里……

私と同じ顔と体……そして魂を持っている大事な私の妹……暖かくて……優しく……可愛くて……私の大好きな妹……私の事を大好きで居てくれる妹……でもなんで、私は絵里の事を忘れていたんだろう……どうしてお母さんは、襟の事を忘れてしまったのだろう……もしかしたら、本当に……絵里という名前の妹なんか居ないで、私が何か勘違いをしているだけなんだろうか……

「ちがう！ 妹は……絵里は、絶対に居る！ 私の大好きな、私の事が大好きな妹は、絶対にいるんだ！」

私は絵里の事を出来るだけ思い出そうとする……私と同じように、長くてサラサラした髪の毛……白くて綺麗な肌……ギョツと！ 抱きついたら、とても柔らかくて、良い匂いのある妹……姉の私と同じ位の、とっても美人で綺麗な妹……でも……思い出そうとすればするほどに、絵里の姿がだんだんに解らなくなってきて……どんだん記憶の中に絵里が居なくなって行くような気がする……どうしてなんだろう？

コッソリ！

小さな音がした。

（お母さん？）

お母さんが、二階に上がってきて来てくれたのかと思っただけ、その音が聞こえたのはドアの方ではなくて、窓の方から聞こえてきた。

（なんだろう？）

何の音だろうと思って窓の方へと目を向けた先にあったのは……

「あひっ！」

声が喉に引っかかり出てこない、逃げ出したいけど体が動かない……夕闇がせまり暗くなってき始めている窓の外、その窓ガラスに張り付いていたのは、大きな黒い影と恐ろしい顔だった。そしてその恐ろしい顔の頭には、大きな角が生えていた。

「最近は生意気になっちゃって……」

それでも……その生意気さ加減が、娘の成長の証明でもあり少々嬉しいと思ったりするのは、親の欲目だろうか？

考えれば、自分も小さな時は母に……

『そんな我侭ばかり言っていると、山から鬼が降りて来て食べられちゃうわよ！』

などと、自分がさつき娘に言ったのと同じ事を言われていた様な気がする。

自分が住んでいるこの地方には、昔からの言い伝えというか、言われていた事がある。

裏の御山には恐ろしい鬼が住んでいて、山の上から何時も里を見ており、そして悪い子供を見つけると里へ降りてきて、その悪い子をさらって食べてしまうと……良くある子供騙しのお話だが、自分が子供の頃は本気にしていたものだ。ただ最近の子供はさすがに騙される事もなくなつたよつだけだ。

手に持った湯飲みの中身を、ズスツ……と飲み干し、椅子から立ち上がる。

「やつと……」

そろそろ頃合だろう。

二階の自室で拗ねている理恵、何を思ったのか、突然に居もしない妹が居ると言い出した末に、勝手に腹を立てて二階の自分の部屋に引きこもってしまった。

まあ……思い込みというか、自分で妄想した事を、本当の事だと思い込んでしまった結果の言葉だろう……自分も昔は、弟が居るなんて事を、両親に言つたよつな記憶がある。

冷静に考えれば、妹なんて居ないと言つ事は、既に判っている筈だ。だけどその事を言い出し難くなつてしまい、二階で拗ね続けているのだらう……もう少しの間、ほっとくのも面白いかもしれないけど、そろそろ切つ掛けを与えてやるのが、優しい母親の役目というものだ。

そんな事を考えながら、二階にある理恵の部屋へと、機嫌を取る為のお菓子と飲み物を持って、階段を上がついていく、そして理恵の部屋の前まで来て、コホンと息を整えながら、部屋のドアをノックしようとした時、窓ガラスが割れる大きな音と紗江子の悲鳴が、ドア一つを隔てた先から、私の耳の飛びこんできた。

「理恵、 どうしたの!」

慌てて理恵の部屋の中へと駆け込んだ私が見たのは、窓を突き破り、部屋の中に入ってきた黒い影が、小脇に理恵を抱え込んでいる姿だった。

「理恵!」

「お母さん、 たすけてえ!」

娘の手が、私の方へと伸ばされる。

反射的に、伸ばされた娘の手を掴み、その何から理恵を取り戻そうとした私だったが、無造作のふり払われた腕が、私の着ている服を引き裂きながら、私の体を部屋の隅へと弾き飛ばす。

「あつっ」

「おかあさん! おかあさん!」

壁へと弾き飛ばされ、意識が遠のきかける……だが娘の悲鳴が、遠くなっていく意識を必死に現実へと引き寄せ、ふらつく体で再び、理恵を抱え込んでいる黒い影に、体当たりをするようにむしゃぶりつき、その黒い影から理恵を取り戻そうとするが……

「づぐう……」

黒い影に抱き付いた瞬間、むわつとするような異臭……人の体臭ではない、何時か理恵を動物園に連れて行った時に、獣がいる檻の中から漂ってきた獣の臭い……獣臭が、鼻孔に流れ込んできた。

「理恵を放して! 誰か、誰か来てえ!」

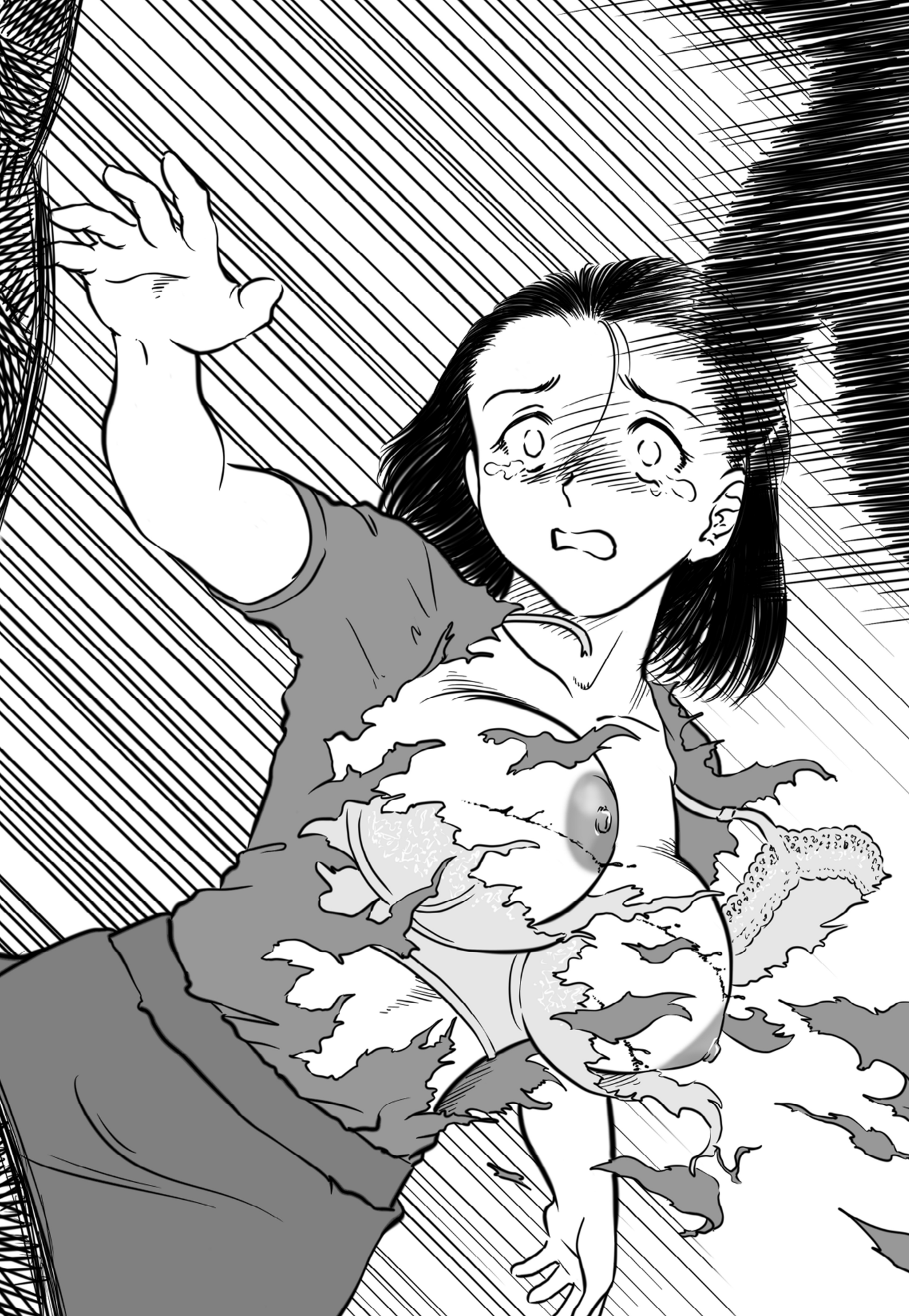
そんな事に構ってなどいられない、必死になり理恵を取り戻すと足掻く私であったが、再び黒い影に振り払われ、再び部屋の壁へと叩き付けられる。

「あぐう……ぐうぶ、かえして……理恵を、おねがい……おねがい……」

叩き付けられた体の激痛が、消えかける意識を辛うじて繋ぎ止める。呻くようにしながら黒い影へと、這いずる様に近づき、必死に懇願する私へと、その黒い影が視線を向ける……

「はあ……ひい……」

私は、この時になって、初めて黒い影の正体を知る……その黒い影の正体……ねじくれたような角を持つ異形の存在……それは紛れもなく……鬼であった。



「かえして……理恵を、かえして！」

だが、それが何であったとしても娘を助け出さなければならぬ、私のただ一人の娘なのだから……この時に、不意に違和感の様な物を感じ取る……理恵……私のただ一人の娘はず……だけど本当に私の娘は、理恵だけだったのだからかと言つ心の奥底から湧き上がるような思い……？

「理恵！……絵里……？」

鬼に抱えられている理恵……他の娘の名前が、口からこぼれ出すように漏れる。

「絵里……？」

しかしそれも一瞬の事、不意に理恵を抱え込んでいた鬼の腕が緩み、抱え込んでいた理恵の体を放す。

トサリ……と、床に落ちる理恵の体、駆け寄ろうとした私の体が、鬼に掴まれ引き寄せられる。

「なにを、はなして、早く理恵の所に行かなくちゃ、はなしてええ！」

その場に私の体が押し倒される。

「なにを、いやああ！ はなして、やだああ！」

押し倒された私の体の上へと、鬼が覆い被さってきた。

「ひい、はなして、誰か、誰か助けてええ！」

身に着けている下着が、引き裂かれ、剥き取られる。両足が大きく押し広げられ、何もかもが剥き出しに曝される股間、その股間へと、常識では考えられないほど巨大な物体が、問答無用に押し付けられる。

「いやあ、そんなの入らない、無理だから、無理だからやめてえ！」

何とか押し付けられるモノから逃れようと足掻くが、押さえつけられている体は動かす事は出来ず、それどころか逆に引き寄せられ、股間へと押し付けられたモノが、じりじりと私の胎内へと突き込まれていく

「やだあ、いやああ！」

じりじりと捻じ込まれ、押し込まれていく鬼の凶悪な塊……その塊が、一気に私の胎内へと突き込まれる！

「ひいぐいぎやあううあ！」

ボコリ！ と腹が、突き込まれた物体の形と同じ様に膨らみ、腹の皮が引き伸ばされる。

「あぐうあああ、いぎゅうう……ぐうばあうああ、ひいぎやあうう！」



以降は製品版にて！